

9・11教訓 子ども向け教材開発

柔らかな心の「住民」に 10ステップで異文化理解

2001年9月の米中核同時テロを身近に経験した日本人女性が、架空の理想郷「地球村」を目指し異文化理解を学ぶ体験型教材「地球村への10のステップ」を作製。26日、新宿区で日本初公開する。五輪開催年の今年、いまでも争いは絶えない。地球村の住民になるには一。



パスポートやワークブックなどカラフルな教材

「この項目のポイントは」「子どもの言いがかりや強い」。港区で開かれた地球村指導員の研修。男女五人が教材や世界地図を手に話し合った。

能力開発・研修会社社長の織田善行さん(左)は「知的好奇心を刺激し、考えさせながら違う価値観を教えられる。五十代のコンサルタントの女性は「争いをなくす、俯瞰の視点が養える」と感想を語った。「大切なのは心の間口を広げること。教材の考案者で特定非営利活動法人(NPO法人)「グローバルみらい塾」塾長の渥美育子さん(右)も。教材作製のきっかけは9・11テロだ。

米国内企業幹部向けの研修会社を営む渥美さんは、あの日、ニューヨークの取引先に行った。「外で何か起きている」。テレビで世界貿易センタービルへ飛行機が突っ込んだ映像が流れた。知人の事務所がある。近くに義理の息子の会社も。出張する娘は空港にいる。安否は……。連絡がつかない。

混乱は続いた。テロが起きるかもしれない場所が、連日テレビで流れる。ガスマスクの使い方を説明するチラシも入った。

半年近くたち、現場を訪れた。

細胞の一つ一つが揺さぶられるような衝撃を受けた。「どんなに正しいと思っても、暴力に訴えるのは間違っている」。何かできないか。悩んだ末、研修ノウハやを生かして子ども向けの異文化理解の教材を作ろうと決めた。試行錯誤の日々。悪夢を見た。「三千人のテロ犠牲者が『早く何とかして』とつめこんで」

ようこそ！地球村へ



子どもたちは「地図」をもとに、地球村の住民への旅を始める



●段ボール箱などで「地球村ランド」を巡る乗り物を作る子どもたち=米ニュージャージー州で(渥美さん提供)
●指導員の研修をずる渥美さん(右から2人目)=港区で

三千五万国の人の意見を盛り込んだ教材は、地球村への道のりを示すラーニングマップやワークブックなどからなり、指導者用三万円、利用者用二千五百円。対象は七十五歳。応用すれば大人も使い、米国のある教育賞に推薦されるなど、海外で注目された。

舞台は仮想の遊園地「地球村ランド」。遊園地を旅する乗り物を作り、駅を模した10のステップで地球の成り立ち、世界子どもサミット開催、地球村創設を疑似体験。世界の文化、歴史、経済、科学などを学び、地球規模の視点を養う。

例えば「違いを知ることがテーマのステップ二。白地図を渡され、アジアや米国など中心を変えて地図を作り、世界の見え方の違いを実感する。続いて人の行動や社会ルールの基礎である法、道徳、宗教の「三つの文化コード」を学ぶ。

指導員が各コードの違いを説明し「少女が宝右箱を盗んだ。各コードでどう処罰するか」と質問、利用者考えさせる。文化圏が違えば、同じ行為が異なる扱いを受けること、ルールの違いを理解する。

各コードに優劣はない。「だから相手の意見を聞く必要性に気付く」と渥美さん。それは、他人の命を思うことにもつながる。「一人間は唯一でかけがえない存在。残酷だが、素晴らしいものも生む。地球村はみんなの中にある。大きく柔らかな心をはぐくんでほしい」と願う。

二十六日は午前十時から、新宿区西新宿二の新宿住友ビルで。国内外の子どもが参加予定で、十五歳以下なら大人参加できる。見学は定員なし。無料。問い合わせは同塾電話03(35580)15888へ。

文・中沢佳子/写真・由木直子、市川和宏/紙面構成・岡博大